自主防災組織災害対応訓練
イメージＴＥＮ　シナリオ（手順）

１　イメージＴＥＮとは

自主防災組織の役員を中心に、災害時にどう対応したらいいかを考えるイメージトレーニングです。

参加者が自主防災組織の役員となった場合の疑似体験を経験することで、地域における災害対応を俯瞰的に理解することができるものです。

イメージＴＥＮの「ＴＥＮ」の名称の由来は、Ｉｍａｇｅ　Ｔｒａｉｎｉｎｇ　＆　Ｅｘｅｒｃｉｓｅ　ｏｆ　Ｎｅｉｇｈｂｏｒｈｏｏｄ。すなわち、近隣のための仮想訓練・仮想演習という意味ですが、付与される課題の数が最大１０用意されていることも「ＴＥＮ」の由来でもあります。

２　イメージの対象となる地域

実在の地域でも、架空の地域（地域Ａ）でもかまいませんが、参加者が特定の地域事情を把握している場合や特定の自主防災組織の役員で行う場合は、できる限り、実在の地域を対象とします。

３　準備するもの

ア　イメージする地域の設定条件（設定条件を記載した地図または資料・凡例）
イ　参加者に付与する課題（対象地域で想定する事象、被害などのシナリオ）
ウ　対象とする自主防災組織の役員人数（架空の場合は想定人数を設定）
エ　防災資機材の品目と数量（架空の場合は標準的な品目と数量を設定）
オ　筆記用具、文房具類

※ 対象地域の地図については、実在の場合は適当な縮尺の地図を使用。架空の場合は、地域Ａの地図（県危機管理部危機情報課作成）を使用する。

※ 地図はイメトレ開始前に調製しておくとよい。

※ ウ及びエで設定した人数と資機材等については、役員（表１）及び防災資機材（表２）の管理表（出入表）を使用するとよい。カードやピンなどの文房具類を使用してもかまわない。

４　対象地域の設定

実在の地域を対象に行う場合は、実際の情報を設定して参加者に認識してもらいます。（参加者のほうが地域事情に詳しい場合もあります。）

架空の地域を対象とする場合は、地域Ａまたは主催者が創作した地域を設

定します。

県が研修で使用している地域Ａについては、津波や山がけ崩れの心配はない標準的な地域としています。地域Ａの地理的条件は下記のとおりです。

これらの条件を共通認識、前提認識として行います。

※　下記の地理的条件は、詳しく説明する必要はない。パワーポイント画面で表示するか、または紙に記載して各グループごとに配布する。

＜架空地域Ａの地理的条件＞

・ 地域Ａは、津波や山がけ崩れの心配のない平野に位置する０．４平方ｋｍ（東西５００ｍ、南北７００ｍの範囲）

・３００世帯、１０００人が居住

・ 世帯の多くは一戸建て住宅だが、広い庭を有しているところはほとんどない。マンションなどの集合住宅も存在する。

・ 地域内を貫通する幹線道路には、小学校、商店、飲食店、会社事務所などが立地。地域の北側一帯は田畑もある。

・ この地域に古くから居住している世帯は何軒かあるが、住宅地の多くは平成元年頃に開発された。

・ 町内会活動や自主防災組織活動は至って標準で、地域の運動会や防災訓練は年１回開催。参加者は全世帯の半数程度

＜地図上の表示＞

・ 防災倉庫は地域の中心地点Ｘの近くに立地しており、「□倉庫」と表示。

・ 広域避難地はＥ小学校のグランド、避難所はＥ小学校の体育館、救護所はＥ小学校の校舎に設置される。

・ 一次避難地など住民が避難できる場所は「○ひ」と表示。

・ 病院や診療所は「○病」、スーパーやコンビニは「☆」、工場は「○工」、ガソリンスタンドは「○ＧＳ」、危険物取扱事業所は「○危」と表示。

・ 耐震貯水槽と消防水利は「○水」、消火栓は「◎」と表示。地震発生後も機能する。

・ 他は臨機応変に仮想して判断する。

５　参加者を対象地域の役員に割り当て

地域がイメージできたら、次に、参加者を対象地域の自主防災組織の役員になったと仮定して割り当てます。実際の役員で行う場合は、そのまま役職を充てます。

各グループに配布してあるＡ３横型の表１（３のウ）にある役員記入欄に、会長から防災委員まで１０人分の枠があるので、各グループごとに役割を決めて、表１の網掛けしてある欄に氏名を記入してもらいます。

なお、役職に会計とありますが、この演習で行う会計事務はありません。単なる役員の一人として考えてください。

地域Ａの自主防災組織では、自主防災組織の役員は、情報班、消火班など７つの班の班長、副班長がいることにします。

各班には、班員がいて、災害時には一定の業務を担うことになっていますが、その人数は、地震発生の設定条件が決まった後に記入します。

※　できる限り早く決めてもらう。最後のグループが書き終えたら、次の説明に移る。

６　地震の発生条件

次に、東海地震（大規模地震）の発生条件を決めます。

進行役があらかじめ決めておいてもかまいませんし（時間がないときは決めておいたほうがよい）、その場でくじ引きにより決めてもかまいません。

くじ引きで決める場合は、次の手法を参考にしてください。

＜くじ引きの手法（例）＞

いずれか４グループの各代表の方にくじを引いてもらいます。

４人に前に出てきてもらい、あらかじめ用意した４種類のくじを順番に引いてもらいます。

くじは、細長い固めの紙や札のようなものを使います。ネタがばれないように、一人目の人には「月（１２本）」を、二人目の人には「曜日（７本）」を、三人目の人には「時刻（０時から２時間おきくらいに１２本）」を引いてもらいます。

少し、間を空けて、四人目の人に「天候（８パターン）」を引いてもらいます。

※　天候は「晴れ・無風」「晴れ・強風」「晴れ時々曇り・無風」「曇り・無風」「曇り・強風」「曇り時々雨・無風」「雨・強風」「大雨・無風」の８種類（８本）

４人にはグループに戻ってもらい、くじで決定した地震発生条件を参加者全員に認識してもらいます。

「平成〇年×月×曜日の×時に東海地震（大規模地震）が発生しました。
地域Ａは全域震度６強以上の強い揺れが１分以上続きました。
そのときの天候は「××」です。」と。

７　自主防災組織の本部設置

地震の揺れも収まり、**参加者は無傷で助かったという前提**でイメージトレーニングを始めます。

ここで、各グループで設定した地域の自主防災組織の本部を設置するよう伝えてください。もちろん、実在の地域で行う場合は実際の場所に本部を印してもらいます。地域Ａで行う場合は、各グループごと自由に場所を決めてもらいます。（大抵の場合、地域Ａのほぼ中央にあるコミュニティセンターが選定される。）

「本部は停電により電気機器類は全く機能しておらず、通信機器もほとんど使えない」という状況であることを補足してください。

次に、表１の各班長、副班長さんが集まってきたとして、アルファベットの氏名が特定されていない班員の人数を確定します。

人数は、地震発生の曜日と時刻によって変えることとします。

下記の３パターンで人数を変えます。実際の役員で行う場合は、考えられる参集人数を記入してもらいます。

地域Ａで行う場合は、

①　夜間または土日の午前９時頃まで
　「被災者以外はほぼ全員集まりそう＝**各２０人**」

②　土日の昼間
　「外出と在宅が半々くらい＝**各１５人**」

③　平日の昼間
　「地域に就業年齢層がいない＝**各１０人**」

とします。

表１の各班員人数のところに（①～③）の人数と記入するようにしてください。

次に、Ａ３横型の表２（３のエ）で示す防災資機材と防災用品が防災倉庫に保管されていることとします。これらの資機材は適宜使用できることにします。

地域Ａで行う場合は、表１及び２を参考に、**付与される課題ごとに「誰が、何人で、どこに、何を、いくつ持っていくか」対応を決め、その状況を管理**

しておくように伝えます。

もちろん、実在の地域の情報で行う場合は、実際の防災資機材等の品目と数量をリストアップした資料を使用して出入り管理をするようにしてください。

ここまでで、質問を受けつけます。

※　ここまでで１５分から２０分かかる

８　課題付与

いよいよ、設定した地域で様々な出来事が起きることとします。

再度、地震の発生条件を復唱します。

「平成〇年×月×曜日の×時に東海地震（大規模地震）が発生しました。
地域Ａは全域震度６強以上の強い揺れが１分以上続きました。
そのときの天候は「××」です。」と。

ここから時系列で課題を付与し、**各グループでどう対応・対処するか考え、意見交換**してもらいます。前述のとおり、表１及び２を活用して、**誰が、何人で、どのように行動するか、必要な資機材や防災用品については、何をいくつ持っていくのか**を決めてもらいます。

課題は、１から１０まであります。１課題当たり、５～１０分間で検討してもらいます。

時間がある場合は、課題１０まで行うことが理想ですが、所要時間や参加者によって、適宜抜粋してかまいません。抜粋する場合は、下記の付与パターンを参考にしてください。

（課題１０まで行うと、課題検討の時間だけで２時間程度要します。）

＜時間がない場合の付与パターン＞

① 課題１～課題６（課題1と情報1を除くとさらに時間短縮可）　約１時間 15 分
② 課題１～課題７　約１時間半
③ 参加者がＨＵＧ経験者の場合は、課題９を省略　約２時間

課題付与の方法は、パワポでスクリーンに映すこともありますが、カードやＡ５程度の紙に記載して、上記の時間間隔ごとに配布する方法があります。

準備ができたら始めます。最初の課題を配布してください。

※　課題内容は別紙のとおり。

※　課題内容は対象地域の特性に応じて、適宜、変えてかまわない。

※　あまりがんじがらめにならないよう、多少大雑把でよい旨を伝えておく。また、課題を付与した後は、進行役はできる限り話をしないで、グループの意見交換に集中してもらう。

※　課題検討にかかる時間は、５～１０分間（１課題当たり平均７分間）として見込む。

※　架空地域Ａで行う場合、地図内に記載がない情報は、適宜参加者が仮定してかまわない。

９　振り返り

終了時刻が来たら、途中でも終わりにします。

残りの時間で、各グループは課題にどう対応したのか、あるいは、どのようなことに悩んだのか、何か疑問が生じたのか、新たな発見があったのか、演習をやった感想などを発表してもらいます。

最後に、ポイントになることは、適宜、解説を加えるようにします。

※　振り返りは全体で１５分から２０分程度。発表や解説が多くなると３０分かかる。

※　時間がない場合は省略、または、１～２グループのみの発表にするなど調整する。

＜解説例＞

①本部の場所選定時

・　自主防災組織の本部施設や倉庫は、震度６強以上の揺れにも耐えられる構造であること。また、津波や山がけ崩れの想定区域にないこと

②課題１関係

・　停電や電話が通じない状況下での情報収集は、本部から取りに行って集約することは難しいため、あらかじめ、本部に情報を報告する役割の人を決めておく

・　情報は条件の良いところから入り、被災が甚大であるところからは情報が入ってこないことを認識しておく

③課題２、課題３関係

・　倒壊した建物からの救出救助には、１軒当たり大人１０人以上が必要

・　資機材の運搬にも一定人数が必要

・　１軒当たり２～３時間を要する

・　同時に複数の場所で発生する可能性が高いことを認識しておく

・　人手が不足する場合は、役員以外の住民にも手伝うよう呼びかける

④課題４関係

・ 初期消火は数分間で対処しなければならない

・ 初期消火は時間との戦いだが、そのような状況の中でどう水を確保するのか具体的に考え、準備しておいてほしい

・ 可搬ポンプの使用には大人６人以上が必要

・ 消火栓や貯水槽は実際に使用できるか確認しておく。特に地下式の場合は蓋の開け方も知っておかなければならない

・ 消火器を各地に配備するなど有効に使う方法を検討しておく

・ バケツを利用する場合は、水を汲み上げるために、バケツに結ぶロープも必要。また、住民が列をつくってバケツリレー方式で消火活動に当たることが望ましい

・ 初期消火以外で注意すべきは、火災発生と同時に延焼火災を想定する

⑤課題５関係

・ 延焼火災の避難先は臨機応変に判断し、風向きによっては必ずしも一次避難地や広域避難地が絶対安全というわけではない

・ 風が強い場合は飛び火することもあり、同時に複数の火災が発生する可能性が高いこと認識する

・ 避難誘導班員は自ら率先避難を実行し、地域住民に避難を呼びかける必要がある

⑥課題６、課題７関係

・ 被災直後は住民自らが応急救護を行わなければならない

・ 住民ができる「スタート式トリアージ」の実施が求められる

→ スタート式トリアージはインターネット等で把握しておくとよい

・ 負傷者の搬送は最寄りの救護所であり、安易に救護病院へ搬送しない

・ 担架搬送は最低６人必要。４人では無理ということを認識しておく

・ 救護所はすぐに開設されない場合も想定しておく必要がある。そもそも住民の多くが救護所の場所を知らないので、事前に周知しておく必要がある。

⑦課題８関係

・ 避難所の鍵は誰が管理しているのか、誰が開錠するのか、誰の判断で開設するのか、応急危険度判定は行うのか行わないのか、どのタイミングで入所の受付を開始するのかなど、初動（立ち上げ）の手順が決まっていないことが多いので、三者協議の内容を明らかにし、関係者で手順を共有し、それをしっかりと引き継ぐこと

⑧課題９関係（ＨＵＧ経験のある参加者の場合は省略可）

・ ＨＵＧを経験したことがない人は、様々なハンディキャップのある人が入所することや、ペット対策が必要であることなどを認識しておく

⑨課題１０関係

・ 在宅避難している人のケアを忘れない

・ 情報班や生活班、安全班などが対応する
・ 火事場どろぼうも多発するため、在宅生活者のケアにあわせ、防犯活動やデマに対する注意喚起なども行う必要がある

⑩総括

・ このイメトレを行うと「自助」「共助」の重要性が理解できる
・ 地域防災にはたくさんの人数が必要である。特に、建物の倒壊や火災の同時発生が予想されることから、役員以外の住民がいかに参画してもらうかが重要。中高生にも呼びかける。
・ 防災資機材や防災用品は地域で起こり得る災害に対応できるものを用意しておく。燃料やバッテリー・部品など、本体に付随しているものが完備されていないと、実用できないことを日頃から認識しておく
・ 地域における災害対応の負担を軽減するためには、一人ひとりの事前の備えや防災対策がいかに重要であるかが理解できる。

１０　利活用・普及促進について

地域の防災地図づくりを基本とするイメージトレーニングであるＤＩＧと区別するため、「イメージＴＥＮ」の愛称は自主防災組織（本部役員）の災害対応をイメージトレーニングする目的で行うものに限定します。

各位が主催する場合は、進行方法や各種条件設定、付与する課題の内容などを適宜アレンジしてかまいません。

なお、「静岡県危機管理部とふじのくに防災フェローが共同で考案し、普及に取り組んでいる」旨を御紹介いただければ幸いです。